

# 經濟論叢

第152卷 第4・5号

---

ホートリー・コネクション I	小島 専孝	1
ケインズと1914年の金融恐慌	岩本 武和	25
アメリカ電話事業におけるユニバーサル・サービス (1)	西田 達昭	49
韓国における労働力輸出の展開	南 有哲	63
時系列と集計	中敷領 孝能	84
日本における塩化ビニール産業の基盤形成とその諸要因	岡本 利生	102

学 会 記 事

---

平成5年10・11月

京 都 大 学 經 濟 學 會

## ホートリー・コネクション I

——R. G. ホートリー：『一般理論』の祖父——

小 島 専 孝

本稿の表題は、もちろん、ウィクセル・コネクションを意識している。ウィクセル・コネクションとはウィクセルの貨幣理論の流れにリンダール、ミュルダールらのストックホルム学派やミーゼス、ハイエクらのオーストリア学派を位置づける（これは正当である）だけでなく、ケンブリッジ学派のロバートソン、ケインズ、そしてホートリーをも含める考え方を指すが、本稿ではとくに、ケインズおよびホートリーをもウィクセルの系譜として位置づけ、ハイエクらと一括して「貨幣的経済学」とする考え方を問題にする。ケインズがウィクセルの知的系譜に属するという事はケインズ自身によって表明されたが、近年ではレーヨンフーブドの論文「ウィクセル・コネクション」(Leijonhufvud [1981] 所収) が学説史の世界にも影響を持ち始めた。平井氏の「ケンブリッジ学派における二つの流れとケインズ革命」という論文は、まさにウィクセル・コネクションという考え方をケンブリッジ学派の研究に適用しようとするものである。本稿は、学説史研究におけるウィクセル・コネクションという観念を否定し、ケインズに関する限り、「話はホートリーから始まった」(Hicks [1977], p. 118, 154頁) と主張する。

### I 序論あるいはウィクセル・コネクションと実物的分析・貨幣的分析

平井氏はケンブリッジ学派をマーシャルの流れとウィクセルの流れの二つの潮流で特徴づけようとする。しかし、平井氏は系譜に属するとされる経済学者の理論を、個々別々に、並列的に論ずるだけである。それはレーヨンフーブド

によるウィクセル・コネクションの系図 (p. 133, 図7-1) においてホートリー、ロバートソン、ケインズ (『貨幣論』) が並列されているのと軌を一つにしている。「流れ」といいながら「流れるもの」を語ることがない。それゆえホートリーはウィクセルの流れの中で論じられていながら、「マーシャルの流れとも、ウィクセルの流れとも異なる景気変動論 (ただし後者の流れに近い) をきわめて早い時期から独自に展開してきた」という文章<sup>1)</sup>があったりする (281頁)。「独自に展開してきた」にもかかわらず、「ウィクセルの流れに近い」としてウィクセル・コネクションとするとところに平井氏のアプローチの特徴がよく現れている。

1) この文章についても検討の余地はある。たとえばケインズは、ホートリーの理論は「最初はマーシャル博士ついでピグー教授によって長年、印刷物においてよりも講義において詳細に説かれてきた学説に似てなくもない」(Keynes [1920], p. 363) といい、シュンペーター [1954] も「彼の説を特徴づけている命題の大部分は、マーシャル (および若干はウィクセル) に遡られる」(p. 1084, n. 8) といっているからである。

また、ウィクセルとの関連について平井 [1987] は『好況と不況』に「明瞭にみとめられる『利子と物価』の影響 (たとえば pp. 76-77, pp. 186-186) についてなんの言及もなされていないのは不思議である」(14頁注30) と述べていたが、シュンペーターはウィクセルの影響があるといっているのではないだろう。マーゲット [1938] はホートリーの分析は「実は、ウィクセルとワグナーによって代表されるトゥックの2つの系譜における最良のものすべての結合に帰される」(p. 340) としている。トゥック-ウィクセルの系譜は「すべての貨幣所得の総額」(GBT, p. 6) で示されているホートリーの「需要」に対する強調に見いだされ、またトゥック-ワグナーの系譜は「消費者所得および消費者支出」と「取引者の売買高」との区別、および「消費者残高」と「取引者残高」の区別に見られる。しかし、マーゲットは「もちろん、ホートリーが自己の議論をワグナーとウィクセルとは全く独立に発展させたことはあらゆる証拠が示すであろう」(p. 340, n. 114) と述べ、その「所得アプローチ」の系統図 (p. 343) においてホートリーを独立させている。またケインズはウィクセルに結び付けられていない。

なお、ウィクセルは1907年に論文“The Influence of the Rate of Interest on Prices”を『エコノミック・ジャーナル』に掲載しているが、ケインズが『エコノミック・ジャーナル』の編集者となったのは1911年のことであり、またホートリーが処女作『好況と不況』の執筆を始めたのは1909年3月であった (GBT, p. vii) から、ケインズもホートリーも「ウィクセルの貨幣理論のエッセンスと彼の問題意識がコンパクトな形であらわされている」(菱山 [1967], 5頁, 注4) この論文を見ていないようだ。

けれども、平井氏は、累積過程の分析はウィクセルに始まるということはまったく疑う余地もないことと認めているように見えるが、それが問題である。ウィクセルは発見したのではなく (ソントン H. Thornton およびジョプリン T. Joplin を) 再発見したという議論 (Humphrey [1986]) もあることだから、ホートリーが独自に (再) 発見して何の不思議もないだろう。ちなみにホートリーは、ジョセフ・チェンバレンが関税改革案のために不況の1903年の輸出を好況の1873年の輸出と比較して以来、景気変動に関心を持ち、『不況委員会報告』[1886] を読んでいた1909年に実質利子率概念を (再) 発見している (GBT, p. vii)。

私は、もちろん、ケインズとウィクセルの比較<sup>2)</sup>が有用でないといっているのではないし、ケインズにウィクセルの影響がないといっているのでもない。ケインズをウィクセルの流れに位置づけても一貫した「流れ」をいうのなら、それはそれでよい。たとえば矢尾（〔1964〕、第1編）は、「無差別総計的把握」と「貨幣ベール観」をもって貨幣数量説の基本構想ととらえ、「数量説の批判と克服を目的とする」貨幣的経済理論の展開を「貨幣経済の無差別総計的把握から循環構造的把握の発展」という「貨幣経済の把握方法」、および「貨幣ベール観から貨幣非ベール観への発展」という「貨幣作用の分析」という2つの観点から把握する。とくに「貨幣作用の分析の理論的基盤を提供する」貨幣経済の把握方法について、貨幣経済的循環の視角はウィクセルによって始まり、循環の内容はハイエク、ケインズによって発展したという主張（78頁）にとくに反対しようというのでない。そうではなくて、理論の形成史の文脈において

- ① 自然利子率と貨幣利子率との相対的關係による物価水準変動の説明
- ② 価格水準を安定化させるうえでのバンク・レート政策の重視
- ③ 貨幣的均衡の3条件の同値性の承認

ということをあげる（平井〔1993〕、290頁）だけで、『貨幣論』がウィクセルの流れに属するというのでは、ケインズーハイエク論争を思うと（あまりにも不毛だ）とってしまう。

ハイエクは、平井氏と同様、『貨幣論』をマーシャルの流れのケンブリッジ学派に生じたウィクセルの流れとして位置づけて、『貨幣論』の書評（Hayek〔1931〕）を次のように始めた。

「J. M. ケインズ氏の著書の出現はどんなものでも重大事に違いない。そして『貨幣論』の公刊はすべての経済学者が強い関心をもって長らく待ち続けてきたものである。しかし、結局のところ、『貨幣論』は急速な知的発展過程の過渡的局面的発現であることがあまりにも明白——そして自ら認めていると私は思う——なので、その出現はかつて期待されたような

2) たとえば菱山〔1967〕、矢尾〔1950〕〔1962〕は現在においてもきわめて重要である。

決定的重要性を持つとはいえない。じっさい、ケインズ氏が属する学派には従来知られていなかった思考系統の近頃の発見の影響をきわめて色濃く帯びているので、試行的試み——ケンブリッジ伝統の、そしてケインズ氏自身の初期の著作に染み込んでいる貨幣学説に新しい思想を融合する最初の試み——以外の何ものでもない、とみなしてもそれほど不当ではないであろう。利子率および利子率の貯蓄・投資に対する関係を貨幣理論の中心問題にする新しい接近方法は、これはケインズ氏が採ったものであるが、以前の立場から大いなる進歩であり、真に本質的なものに注意を振り向けることは疑いの余地もないように思える。そして大陸の一経済学者には、この接近方法は本書の著者ほどには目新しくは思えないけれど、それでも、従来試みられたどんなものよりも問題の細部と錯綜にまで踏み込んで分析しようとしたことは認めねばならない」(p. 270)。

しかし、ハイエクはウィクセルの流れでは捉えきれず、次のように続ける。「ケインズ氏が成功したかどうかは、いかなる貨幣的説明もその上に立つことなくしては成功しえぬ「実物」経済学の基本的定理を理解することに対して、ケインズ氏が副次的な装飾に対するほどには努力を振り向けなかったということが重大な妨げにならなかったかどうかは、以下で検討されるべき問題である」。ここにいう実物経済学の基本定理とはベーム・バヴェルクの資本理論を指す。すなわちハイエクは、ケインズが(平井氏のあげるような)ウィクセル体系から派生する諸概念を用いながら、ウィクセル体系の基礎であるベーム・バヴェルクの資本理論を完全に無視していることを致命的欠陥としているのである。「ある理論それ自体を受け入れることなく、その理論から導かれる結論だけを利用するという試みが成功するということはア・プリオリにありそうにない。しかし、ケインズ氏のような知的才能の著者の場合には、真に注目すべき結果を生み出すのである」(p. 279) という一方で、「ケインズ氏はベーム・バヴェルク理論の系譜のひとりを受け入れるだけでなく、その理論自体の本質に精通したならばケインズ氏の課題はより簡単になったのではなかろうか」

(p. 280) ともいう。とにかく、ハイエクは「ケインズ氏はウィクセルの一般理論的基礎を完全に無視している」(p. 279) と非難する。

しかし、ハイエクはケインズは間違っていると思っても、ウィクセルの流れとして『貨幣論』をみているので、間違いを指摘するのに困難を感じてしまう。『貨幣論』の第3編と第4編は「極めてテクニカルで複雑なので、専門家でない人には永久にまったく理解不可能のままにあるにちがいない。しかし、この部分に他のすべてが依拠しているのであり、議論の説得力も弱点も集中しているのであり、真に独自の貢献が述べられているのである。しかし、不幸なことに表現はあまりにも難解で非体系的かつ曖昧なので、結論に同意しない同業の経済学者がどこが同意できないか正確に示し反論するのは極めて困難である」(p. 271)。

それに対してケインズも「彼を悩ませているのは、実は、私の用語法でなければ私の分析が完全なものにほど遠い(確かにそうだが)ということでもない。なにかもっとずっと根本的なものである」(Keynes [1931], p. 387) と述べた。ハイエクはスラッファとの論争のなかでスラッファの批判(拙稿 [1987] 参照)が一般均衡理論を否定しようとする異端的な立場からのものであることを看取したほどの人である。にもかかわらず、『貨幣論』について困惑しているのはまさにウィクセル・コネクションという観念のなせる技である<sup>3)</sup>、と私は思う。

ヒックスは、ケインズとハイエクの二人に共通なのは「両者がいずれもウィクセルの知的系譜に属すると主張していたことだった」という文章に「両者に共通なのはこれだけだと思われる」と付け加えた(Hicks [1967], p. 204, 283頁)。両者に共通するところがないといているわけで、これも極端ではあるが、ウィクセル・コネクションという見方よりはるかに正しい、と思う。

ウィクセル・コネクションよりももっと根本的なものとして私が考えている

3) 挑戦的な標題の吉田 [1993] においてもウィクセル・コネクションはケインズの「テキストの構造読解」を妨げるものの一つに数えられている。

ものは、鬼頭 [1942] およびシュンペーター [1954] の実物的分析と貨幣的分析の区別である。

実物的分析 (Real Analysis) は「実物経済を原像とし貨幣経済を仮像とする」もので、貨幣経済に固有な意味は否定される (鬼頭 [1942], 453頁)。シュンペーターを引用すれば、実物的分析は次のようなものである。

「経済生活のあらゆる本質的現象が、財貨とサービス、これらに就いての決定、ならびにこれらの相互間の関係というタームで叙述されうるとの原理から出発するものである。貨幣は、取引を容易にするために用いられた技術的用具にほかならないという控えめな役割をもって、この画面のなかに入り込むにすぎない。もちろんこの用具がその働きを乱す場合がありうるのはいう迄もなく、そういう場合には、なるほど、特別に貨幣の動き方に帰因させられるような現象を生むかもしれない。けれども正常に作用している限りでは、この用具〈貨幣〉は経済過程には、影響を与えることなく、従って経済過程は物物交換経済におけると同じ風に動くのである」(p. 277)。

他方、貨幣的分析 (Monetary Analysis) は、鬼頭 [1942] によれば「貨幣経済に固有の機構を認める」ものであり、シュンペーターによれば次の特徴を持つ。

1. 「貨幣という要素は、通貨的攪乱とも呼ばれうる例外的場合を除けば、現実の経済過程の説明において第二次的な重要性しかもたないという命題を否認せんとする」。
2. 「貨幣の要素をわれわれの分析的構築のいわば基盤に導入し、経済生活のあらゆる本質的特質が物々交換経済のモデルで代表されうるとなす考え方を放棄させるものである」。
3. 「全体としての経済過程の理論」<sup>4)</sup>。

4) シュンペーターは貨幣的分析の第三の特質を「集計的分析 (Aggregative Analysis) または時としてマクロ的分析 (Macroanalysis——巨視的分析) と呼ばれているものを意味している」ノ

ウィクセルおよびハイエクが実物的分析に属する<sup>5)</sup>のはハイエクのことばかりも明らかであるし、また「今日の貨幣的分析の指導的体系たるケインズ派体系」(p. 280, n. 4)とシュンペーターがいうように、ケインズが貨幣的分析に属するのもまた明らかである、と思ったが、近年このシュンペーターの区別に対する関心を復活させたコン [1986] 自体、ウィクセル・コネクションを貨幣的分析としているから、ケインズとロバートソンを論じたシュンペーターの次の文章が私の主張をよりはっきりさせることになるかと思う。

「傑出したこの二人の間の後日の意見の不一致に鑑みるとときには、そこには、その直接の原因がなんであれ、常に次のような基本的な相違があったことに注目するのが望ましい。すなわち、ケインズが最初から貨幣的側面と貨幣政策とに集中したのに反し、ロバートソンは最初から——貨幣的ならびに心理的要因の両者に反対して——「実物的要因」を強調した。かようにしてロバートソン自身のものであった広い地盤が存し、それにはケインズ分析も決して浸透しなかったのである。このようないささか広い枠の中なかでは、ある貨幣的命題も、それ自体として見られたときには同一な貨幣的命題が伝える意味とか内容とかとは、全く異なる意味——ならびに実践的応用に大いに関連して異なる意味——を持つこととなる」(p. 1127, n. 11)。

それでは、ウィクセルではないとしたら『貨幣論』の基礎は何に由来するのか。私は、R. G. ホートリーを考えている<sup>6)</sup>。ホートリーは無視されてきた。

、(p. 178)としているが、実物的分析の集計的分析もある、というより支配的だから、貨幣的分析を特徴づける特質として不適切なので、代わりに「全体としての経済過程の理論」とした。このことばはジョセフ・ハリスに関する注 (p. 291) 中の「彼の立論は、およそ満足な貨幣理論が全体としての経済過程の理論を意味するものであるということを見抜きえない新旧あらゆる著者たちのそれに比較して、優っている」という文章からとった。

5) ウィクセルの著者『国民経済学講義』が2巻本で、第1巻が価値および分配の理論を扱う「一般理論」で、第2巻が『貨幣』となっているのは何かを物語ってはしないか。ともかくケインズは「経済学を一方における価値および分配の理論と、他方における貨幣の理論とに分けることは、私の考えでは誤った分類である」としている (JMK, Vol. 7, p. 293)。

6) もちろん、誰にも負っていない、という考えもある。たとえばモグリッジ [1976] は自然利子率と市場利子率との区別について「『貨幣論』の定式化は文献の知識から独立におこなわれた」



ホートリーの重要性を指摘したデイヴィス [1980], パティンキン [1976] も、『貨幣論』から『一般理論』への移行に焦点を置くという点で間違っている。

しかし、ヒックスは正しくも『貨幣論』の重要な部分が『通貨と信用』への回答という形をとった』ことを指摘した (Hicks [1977], p. 118, 156頁)。なによりも「話はホートレイから始まったことを、筆者は主張したい」(同上)というのがよい。同感である。そして、ケインズ。ケインズは思考形成においてホートリー (およびフィッシャー) を「祖父」と思っていると述べ、多大な影響を受けていることを表明しているのである。

「私がホートリー氏とロバートソン氏を古典派経済学者と思ってる！ オリー教授はそのように考えているように思われるが、私が読者にそのような印象を与えたならばこの機会に直ちに陳謝しなければならない。事実は逆である。彼らの方が私よりも先に囲いからさまよいでた。私は伝統からの脱却過程においてホートリー氏を祖父、ロバートソン氏を親とみなしている。そして彼らから大きな影響を受けている。そしてより早い段階でウィクセルの貢献の詳細を知っていれば、またウィクセルはあえて「古典派」たらんとしているという印象を私が持たなければ、ウィクセルを私の偉大な祖父とすることでオリー教授の不満にこたえることができたかもしれない。実のところ、私に関する限り、偉大な祖父はアーヴィング・フィッシャー教授だったと省みて思う。彼は、貨幣が『実物的 real』要因であると私が考える方向に最初に強く影響を及ぼした」(JMK, Vol. 14, p. 202, n. 2)。

## II ホートリーとケインズの貨幣

貨幣および貨幣経済についての見かたと貨幣の定義あるいは本質論とは相互

---

ようである (これは経済学者としてのケインズの業績において、いつも見られることである)」と書いている (p. 77, 97頁)。なお、ホートリーの経歴については Davis [1981], Deutscher [1990] を参照されたい。ちなみに後者は初の、そして現在唯一のホートリー研究書である。

的であるから、貨幣の定義あるいは本質論を検討する意味は決して小さくはない。「貨幣および貨幣制度は経済理論の出発点とならねばならない」(Minsky [1975], p. 72, 112頁) とミンスキーも言っている。まず、ケインズのもう一人の「祖父」、フィッシャーの貨幣の定義から話を始めることにしよう。ホートリーとケインズの貨幣経済論の性格がフィッシャーとの対比によってより明確になると思うからである。

### 1. フィッシャー

『貨幣の購買力』においてフィッシャーは財を「(人間を除く)すべての動産」と定義し、貨幣を財に含める。「財が『貨幣』と呼ばれるためには交換において一般に受容されうるものでなければならない。また交換において一般に受容されうる財は貨幣と呼ばれねばならない」(p. 2)。法律によって一般受容可能性が高められることは本質的なことではなく、財が貨幣になるために必要なのは一般受容可能性を持っていることだけである。小切手はたとえば受取人の同意によってのみ受容されるので、一般的とはいえないから、預金通貨は貨幣ではない。しかし、貨幣の卓越した代用物である。そこでフィッシャーは財を貨幣、預金(預金通貨)、他のすべての財の3つに分類し、6つの取引類型に到達する(p. 47)。すなわち

- (1) 貨幣と貨幣    (2) 預金と預金    (3) 財と財  
 (4) 貨幣と預金    (5) 貨幣と財    (6) 預金と財

このうち(1)は「両替」、(3)は「物々交換」、(2)と(4)は「銀行取引」ということで、結局、フィッシャーは(5)(6)に焦点を置く。フィッシャーはまず預金通貨を捨象して「各取引において、交換される貨幣と財は、事実上、等価である」(p. 16)ということを出発点とする。第*i*財の平均価格を $p_i$ 、取引量を $q_i$ 、支出された貨幣額を $E_i$ とすると $E_i = p_i q_i$ である。すべての財について足し合わせれば

$$\sum E_i = \sum p_i q_i.$$

となる。すなわち、交換方程式は「一社会の一年間の個別的購買についての方

程式を単純に足し合わせたものからなる」(p. 16)。左辺は貨幣側、右辺は財側を示す。左辺の支出された貨幣総額を  $E$ 、流通貨幣の平均額を  $M$  とすると、 $E/M$  は貨幣の流通速度だから  $V$  と書くと左辺は  $MV$  となる。すなわち、

$$MV = \sum p_i q_i.$$

また右辺は  $PT$  という形に書くことで簡単化される。 $P$  は価格の加重平均である物価水準、 $T$  は取引量である。すなわち、 $MV = PT$ 。預金通貨を考慮すると貨幣側は  $MV + M'V'$  となる。ここに  $M'$  は預金通貨の流通数量、 $V'$  はその流通速度である。かくして周知の交換方程式

$$MV + M'V' = PT.$$

を得る。数量説の貨幣経済観はここまででも十分明らかである。貨幣経済を基本的に(5)の貨幣と財の〈交換〉という視点からみており、「財はただ貨幣によって購入される対象というだけの包括的規定をもって」財の取引量として、「貨幣は財を購入する手段というだけの一般的規定をもって」貨幣の総流通量として、無差別的に総計されている。「無差別総計的把握」と特徴づけられる由縁である(矢尾〔1964〕, 7頁)。

## 2. ホートリー

ケインズの貨幣本質論に関する研究はほとんど皆無に近い。実際、ケインズの貨幣本質論を論じた書物は私が見た中では1冊しかなかった。そこでは「積杆なき體系」などとケインズは厳しく批判されているが、それは著者が金属学説の信奉者(マルクス経済学者)で表券学説をまったく理解できないことによるものであった。その著者はとうとう商品(金)から出発する学説を述べ始めた。まあ、そんな本のことはどうでもよい。以下、ケインズの貨幣本質論がホートリーの『通貨と信用』(CC)第一章「貨幣なき信用」で展開された「抽象的計算貨幣学説」(ケインズの命名)を出発点にしていることを示そう。

まずホートリーは、物々交換に伴う不便・不都合を回避するために一商品が貨幣として選ばれるという学説が、貨幣の役割を示すために貨幣の利用が知ら

れていない未開社会と貨幣経済を比較しがちであることを指摘する。

事実、たとえばジェヴォンズは物々交換に伴う困難を3つ、すなわち、

- (1) 欲望の二重一致の欠如 (Want of Coincidence)
- (2) 価値尺度の欠如 (Want of a Measure of Value)
- (3) 分割方法の欠如 (Want of Means of subdivision)

をあげているが、その書『貨幣と交換の機構』の第一章「バーター」において、パリのオペラ歌手ジェリ嬢のソシエテ諸島でのエピソード<sup>7)</sup>とウォーレスのマレー諸島でのエピソード<sup>8)</sup>を述べた後、ジェヴォンズは次のように述べている。

「現代の文明社会では交換の原始的なやり方の不都合はまったく理解できぬものであり、ほとんど想像上のものにみえるかもしれない。われわれは最古の時代から貨幣の利用に慣れているので貨幣の利用によって与えられた計り知れない恩恵に気づかないでいる。したがって、全く異なった社会状態を思い浮かべたときにのみ、貨幣が存在しない場合に生ずる諸困難を理解できるのである」(p. 2)。

しかし、ホートリーはそのような比較は貨幣の重要性を誇張することになるといい、比較の対象を未開社会ではなく、現代社会に求める。(コペルニクス的転回) といったら大げさか? ともかくホートリーは、貨幣の利用なくしてどの程度まで社会は今あるかたちで存在しうるかという「貨幣の論理的起源」を検討するのである。

7) 公演料の彼女の取り分は豚3頭、七面鳥23羽、鶏44羽、椰子の実五千個のほか多数のバナナ、レモン、オレンジであった。ソシエテ諸島では貨幣がきわめて僅少だったし、食べきれぬ量ではなかったため、彼女はもらった果物で豚や鳥を養わねばならなかった。

8) 「ある島には本来の通貨というものが全くなかったため、特に交渉してその度ごとに大いに駆け引きすることなしには夕食の食料を調達できなかった。魚や他の欲しがられる食料の交易商は望むような交換に出会わなければ通り過ぎてしまい、ウォーレス氏とその一行は夕食ぬきで行かねばならなかった。それゆえ交易商の望みに合う確率を高めるためにナイフやハンカチやアラック酒やサゴ・ケーキのような品物を持ち合わせておくことが極めて望ましいこととなった」(p. 2)。ウォーレスは博物学者 Alfred Russel Wallace (1823-1913) のことで、8年におよぶ探検旅行の観察と見聞をもとに1869年に『マレー諸島』を出版した。ちくま学芸文庫の新妻昭夫訳(詳細な訳注と解題がある)をみると、ジェヴォンズが述べているのはアルー諸島(ニューギニア西方の群島)ドボでの出来事のようなのである。

ジェヴォンズは「多くの未開人の間ではバーターが実際唯一の交易方法である」(p. 2)と述べているが、ホートリーは交換手段が存在しないから直接交換が必然的であるという考えを否定する。すなわち、「ある人が1トンの石炭を売る時、買い手の売り手に対する債務が発生する。しかし、買い手自身は他の人に対して売り手であつたらうし、売り手自身もまた買い手であつたらうから、市場取引者が一堂に会して負債と債権を相殺しあうことができるであらう」(p. 2)。このことは19世紀イギリスの現実がそうであつたらしい。トゥックは『通貨原理の研究』において次のように記している。「銀行券は、商人間の交換にとっては必ず必要というわけではない。そればかりでなく、そのような交換がどういう具合におこなわれるかを、ほんの少しでも知っている人なら、大口の売買取引には、銀行券は事実めつたに使われぬことぐらひは、だれでも知っているにちがひない。イギリスのたいていの卸売取引は、債権・債務の清算、相殺によって続けられ、調節されている」(Tooke [1844], pp. 33-34, 48頁)。

ホートリーは債務の連鎖あるいは「ネットワーク」こそが経済システムの基礎であると考えた。そして債務は「数あるいは量で表示されることを要請する経済関係」である (Hawtrey [1923], p. 48)。表示されるためには何らかの単位が必要不可欠であり、債務を表示する単位こそ計算貨幣なのである。

計算貨幣といへば、やはり忘れられた経済学者ジェームス・ステュアートが、「同等の部分からなる観念的度量標準」である計算貨幣には「標準的な大きさというものがないのであつて、しかも人間がしきたりによつてそれに与えるのが適當と考えるもの以外には、何も必要がない」から、「全く恣意的」であると述べていたが(『経済の原理』6頁)、ホートリーの貨幣なき社会においても単位はまったく「慣行的で恣意的」である。

しかし、とホートリーはいう。「いかに単位が慣行的で恣意的であつても、債務と価格と市場価値の基礎としてひとたび確立されるならば、ある程度の連続性を持つことになる」。すなわち、一日の取引で債権と債務がバランスする

ことはなく翌日に持ち越されるから、同一の単位が用いられ、売買しようとする財の評価の基礎となる。したがって計算貨幣は価格の尺度の単位をも与える。すなわち、価格は「それ自体潜在的な債務である。価格の提示はオファーであり、それを受け入れることで契約が成立し、債務が生ずる」(Hawtrey [1923], p. 49) からである。そしてホートリーは有効需要に言及して次のように述べる。「市場の商品に対する総有効需要は取引者が差し出してよいと思う計算貨幣の単位の数によって制限され、それは取引者が受け取ると期待される単位の数に応じて制限される」。だから、単位が恣意的であっても、購買力の気まぐれなあるいは不連続な変動は生じない (p. 3)。

トックはアダム・スミスに従って「商人相互間の流通」と「商人と消費者の間の流通」を区別し、「商人と消費者との間の交換（そのなかには消費者のおもな収入となる労賃の支払も含まれている）だけを考えると、鑄貨や鑄貨の役目をしている小額の銀行券は、その交換になくはならぬものである」(p. 34, 48頁) と述べている。商人と消費者の流通には貨幣が不可欠である。貨幣なき社会において支払手段としての信用の利用は賃金の支払いにも適用できるのか。ホートリーはいう、「洋傘製造業者は彼自身に対する債務で支払うかもしれないが、労働者が賃金を支出できるためには債務は洋傘製造業者以外の第三者の肩に移転されねばならない。なぜなら洋傘製造業者は洋傘しか売るものがないのだから」。こうした状況は各財の生産者に共通だから、第三者が「債務のディーラー」として専門化すれば問題の解決は容易になる。すなわち、生産者は自己の生産物を将来引き渡すという約束を債務のディーラーに売り、債務のディーラーに対する債権を買って労働者に支払う。債権・債務の相殺は債務のディーラーの帳簿上の振替あるいは銀行券のような債務証書の引き渡しによってきわめて容易になる。「債務あるいは債権のディーラーは銀行である」(p. 4)。

「労働者に銀行の信用で支払いを望む洋傘製造業者は銀行の信用を洋傘の売上から購入しなければならない。しかし、銀行は洋傘を商う気はないし、洋傘

を自分自身のために買うつもりもない」。ホートリーは洋傘製造業者は「洋傘しか売ることがない」から第三者の債務証書が必要というが、マクロ経済学に登場する経済の総産出を生産する企業であっても信用は必要である。銀行信用が支払手段となるのは財の購入者ではない第三者の債務証書だからである<sup>9)</sup>。したがって、銀行が洋傘を商うつもりも自分自身のために購入するつもりもない、ということは実はとても重要なことなのである。

「あらゆる種類の生産者および商人に信用を売るのが銀行の立場の本質だから、銀行の信用はあらゆる種類の支払いにおいて受容される。銀行は財を売るよりは自己の信用を貸すのが都合がよいことを（現実の銀行がそうであるように）見いだすであろう」。銀行が貸付をするとき、2つの債務、銀行の顧客に対する即時的債務と、顧客の銀行に対する将来時点での債務が発生し、前者だけが支払手段として用いられることとなる (p. 9)。

しかし、貨幣が存在しないから取引を終了する上で困難がある。債務の価値は債務者の支払能力に依存するが、普通の債務者の信用は彼の債務が支払手段となるために十分でない。この理由だけでも銀行信用の利用が必要だが、銀行といえども常に問題なく支払能力があるわけではなく、法的に争う余地のない支払手段が必要なのは明白である。かくしてホートリーは貨幣の果たす第1の

---

9) これはチェンチーニ (Cencini [1988], p. 79) にみられる考えである。すなわち、交換手段として用いられるものが債務の承認ならば、その債務証書は財の購入者の集合に属する主体のものであってはならない。彼の議論 (B. Schmitt と Cencini の Quantum-Theoretical approach) は私には理解不可能であるが、しかし、この点はきわめて重要であると思う。

たとえばレイ (Wray [1990]) は内生的貨幣アプローチに基づいてポスト・ケインズ派にみられる種々の貨幣概念を統一的に扱おうとするものの、「貨幣は単に債務（将来から現在に購買力を移転する）であり、交換手段として機能するかどうかはかわりない。したがって、コマーシャル・ペーパーは貨幣として十分だが、交換手段として役立たない」(p. 13) と述べる。また貨幣的交換における第三者の持つ意味を理解していない。すなわち、貨幣的取引は支払者と被支払者のほかに財の購入者の集合に属さない第三者を必要とする。さもなくば信用経済であって貨幣経済でない。しかし、レイは次のように言う。「貨幣は取引者の一方が債務を負い、他方がその債務を保有するとき私的に創造される。この貨幣は交換手段として普遍的に認識される限り、交換手段として『第三者』の間を流通する」(p. 14)。レイにあって「貨幣」は信用あるいは債務の別名であるかのようなのである。かくして「貨幣」は内生的に供給される。

役割を「債務の法的清算手段」とする (p. 15)<sup>10)</sup>。

先に、信用と貨幣の相違に関連してトゥックに言及したが<sup>11)</sup>、トゥックは商人相互間の流通は資本の移転に帰着するとしている (Tooke [1844], p. 34, 48頁)。この点でトゥックとホートリーとは異なるのであり、スミスートゥックよりむしろ「『国富論』の著者スミスの戦術的配慮がはたらいっていた」こともあって忘却されてしまった (小林 [1993], 13-14頁) ジェームス・ステュアートの方がホートリーにきわめて近い<sup>12)</sup>。

「信用は人間どうしのあらゆる契約の基礎である。つまりおよそ契約というものは、即座に実行されることはほとんどありえず、たいいて契約当事者のどちらかの側が、契約のなんらかの履行——すなわち法律家のいう義務の遂行——を、少なくともしばらくのあいだ中断したままにしておくものである。それゆえ自分の役割を遂行する人は、ただ遂行の約束をしているだけの相手方に信用を与えるのである」。

「紙券信用あるいは象徴貨幣は紙券に記入されている一定の貨幣呼称の内在的価値を支払うという債務証書である。したがって鑄貨での支払いと紙幣での支払いとの違いはこの点にあるのである。鑄貨で支払う人は、自分が支払う相手に、借りたものを実際的に所有させるのであって、これがおこなわれたあとには信用はまったく残らない。紙幣で支払う人は、自分の債権者に、その価値を彼に支払う第三者の債務証書だけを所有させるので

10) 即時的に清算される債務の価値は法的に支払いができる手段の価値に必ず等しいから、貨幣は「価値の標準」を与える。これが貨幣の第2の役割であり、貨幣はホートリーのいう信用の不安定性を修正する役割を担われる。信用の不安定性については次稿「ホートリー・コネクション II」においてホートリーのマクロ変動理論とともに説明する。

11) ホートリーとトゥックの類似性は「『物価史』への序説」[1928]でグレゴリーが指摘している (『物価史』第1巻, 22頁)。

12) また、ホートリーのみならず現代の一部の「貨幣循環論者」たとえばグラジャーニ (1990) にきわめて近い。

小林 [1993] によると、『原理』の特徴は「有効需要の経済学 = 貨幣的経済理論と、それにもとづく貨幣・信用・財政政策の体系である」(10頁)ので、戦後、欧米ではケインジアンたちによってステュアート復興が始められたが、『原理』は「ケインズの知識に加わることはなかった」(11頁)とのことである。古い文献のすぐれた蒐集家であったケインズにして知らないのだから、ホートリーが『原理』を読んだということは到底ありそうにない。



ある。この場合には、支払いがおこなわれた後でも信用が必要である」(3-4頁)。

購買は買い手の売り手に対する債務を発生させ、貨幣は債務の清算手段だから交換手段として利用される。支払が現金でなされる時、それはたんに債務が即座に清算されることを意味するだけであり、貨幣での購買はつねに債務の発生と清算とに分解できる<sup>13)</sup>。それゆえ債務の法的清算手段という概念は、交換手段という概念よりも一般的である<sup>14)</sup>。そしてホートリーは、債権者にとって債務の法的清算手段は債務自体の代用物だから、信用が貨幣の代用物というよりも貨幣が信用の代用物という方が正確であると述べる (p. 15)。

「信用の価値は金との兌換性に基づくというより、金の価値は信用との交換可能性に基づくという方がより正確である」(p. 371)。

「鉱山から出てきた金でさえ最初は信用と交換に銀行へ売られるのであり、鑄造され流通に入るのは銀行の顧客が要求するときにすぎない」(p. 380)。

シュンペーターの実物的分析・貨幣的分析の区別に対応して信用の貨幣理論 (monetary theory of credit) と貨幣の信用理論 (credit theory of money) というものがある (p. 717)。貨幣の信用理論は「信用から出発して、資本主義金融を以て、債権債務を相殺し其の差額を繰越していく手形決済制度と見る——従って『貨幣』による支払は一つの特例な場合にすぎず、なんら特別の基本的重要性を持つものでなくなる」というものである。「信用を主たる支払手段とし貨幣を信用の補助物として扱う」(CC, p. 377) ホートリーはまさしく貨幣の信用理論を展開したのであった。

なお、シュンペーターのいう信用の貨幣理論とは法貨を基本として出発し、

13) 現代の経済学者の中でホートリーを最も高く評価したのはヒックスであった。ヒックスにはホートリーに関する論文がいくつかあるが、最後の著書となった『貨幣と市場経済』においてもホートリーの影響を見ることができる。第5章「貨幣の性質」においてヒックスは、取引は当事者間の契約と買い手および売り手の実際の受け渡しという3つの要素に分解できるとしており、貨幣は取引の最初の時点で契約の形成において役割を果たし、終了時に、支払いにおいて役割を果たすものとされ、貨幣の本来の機能は価値の標準と支払手段としている。

14) チェンチーニは「貨幣の交換手段の機能は真の支払手段でもある単位によって演じられねばならない」と主張している (Cencini [1988], p. 79)。

信用用具を付加するものであり、実物的分析の貨幣の扱い方である。

「この信用用具は、法貨の代用物として作用し且つまた洵に法貨の役割に種々の仕方では影響を与えはするものの、然も法貨のもつ基本的な役割を、金融構造の理論的描写のなかからは、決して排除するものではないとされている。実践上この基本的役割について残されているところが甚だ僅少の場合においてさえ、なお通貨・信用・および銀行業務の領域で生起するあらゆる問題が、この基本的な役割から解釈されていることは、あたかも貨幣自体の場合が物物交換から解釈されているのと同じである」(p. 717)。

### 3. ケインズ

ケインズは『通貨と信用』の書評において (Keynes [1920], p. 362), 『通貨と信用』は「多年にわたって現れた貨幣理論に関する研究の中で最も独創的かつ深遠なものひとつ」で、「私の考えでは、少なくともイギリスにおいて、将来の貨幣理論に多大な影響を及ぼすであろう」といい、ホートリーをきわめて高く評価した<sup>15)</sup>。事実、『貨幣論』においても計算貨幣は、「債務や価格や一般的購買力を表示する」ものとして「貨幣理論の本源的概念」とされている (JMK, Vol. 5, p. 3)。『貨幣改革論』で無視した価値貯蔵機能をケインズは計算貨幣にまで遡らせている<sup>16)</sup>のは注目されるが、「債務や価格や一般的購買力を表示する」としか述べられていないのはホートリーの議論を念頭においているためであると思う。そして「その引き渡しによって契約あるいは債務を履行

15) ハロッドによると、1922年秋、ケインズは通貨と信用に関する最もすぐれた学者としてホートリーの名を挙げた (Harrod [1951], p. 357, n. 2, 400頁注1)。また、ケインズの名目主義的立場は「本質論のみでなく、理論と政策的提案を通じて一貫している」(則武 [1978], 140頁)といわれるものだが、これまでクナップの影響しか指摘されていない。しかし、ケインズは現在3つのアプローチがあるといい、「金属塊を正常な組織、他のすべての増大を涵とみなす」金属主義者の粗雑 crude なアプローチ、「国家および貨幣の法貨たる側面をもっぱら強調する」クナップの「精妙すぎる over-subtle」表券主義アプローチのほかに、「同様に精妙な not less subtle」ホートリーの抽象的計算貨幣学説を挙げている (Keynes [1920], p. 363)。

16) 「計算貨幣——われわれが第一章の冒頭で述べた——は、久しい以前から一般的購買力を表わす言葉についての必要を満たすために工夫されたものであった」(JMK, Vol. 5, p. 48)。

する」「本来の貨幣」money proper はホートリーの債務の法的清算手段たる貨幣に対応する。

しかし、ケインズはホートリーの論理的起源の議論を歴史的文脈に読み替えて、ホートリーの議論では慣行や法律という形でしか登場しなかった国家を前面に押し出す。すなわち、「契約と付け値とに言及することによって、既にわれわれはそれらを履行させることのできる法律あるいは慣習を導入している。すなわちわれわれは、国家あるいは社会を導入しているのである」(p. 4)。国家は、まず第一に、「契約に含まれている名称もしくは記述に照応するものの支払いを強制する法の権威として現れる」。次に「いかなる物はその名称に照応するかを定め、これを布告し、そしてその布告をときどき変更する」。このとき本来の貨幣は「表券主義的『国家貨幣』」となる(p. 4)。

銀行預金の量的比重の重要性を指摘するにもかかわらず、フィッシャーもホートリーも銀行信用を貨幣とはみなさなかった。しかし、ケインズは「多くの場合、債務それ自身の移転が、債務を表示している貨幣の移転とまったく同様に取引の決済に役立ちうるという発見」によって利用されるとき「われわれはそれを銀行貨幣と呼んでいいだろう」といい、貨幣という名称を与えた。もちろん「しかし、それが本来の貨幣ではないことを忘れないようにして」という注意をつけ加えているけれど(p. 5)。そして銀行貨幣は「単に計算貨幣で表示された私的な債務の承認にすぎない」が、「人びとの手から手へと渡されることにより、取引の決済のため本来の貨幣と交互に並んで使用される」(p. 5)。ここまではたんに銀行信用を銀行貨幣と呼んだ点が異なるだけでホートリーと同じである。しかし、ケインズは国家の存在によって銀行貨幣が本来の貨幣を変容させることを指摘する。

銀行貨幣は「国家の負う債務を表すものになり、そして次に国家はその表券主義的特権を利用して、この債務それ自身が負債を弁済するものとして受領されるべきことを布告する」(p. 5)。債務の法的清算手段となった銀行貨幣は「性質を変えてしまっており、そしてもはや債務とみなされるべきではない」

のであって、ケインズは「代表貨幣」Representative money と呼んだ。「それ自身以外の何かあるものをもって支払いを強制されるということが債務の基本的性質だからである」(p. 6)。代表貨幣という概念は革新的である。ケインズは単に量的重要性だけから銀行信用を貨幣としたのではないのである。このケインズの態度は名目国民所得などの他のマクロ変数との関係から貨幣を定義する現代の支配的傾向と対照的である。

ケインズは「国家貨幣」のなかに「それ自身強制法貨である貨幣だけではなく、国家または中央銀行がそれ自身への支払いに対して受領すること、あるいは強制的法貨と交換することを保証している貨幣」をも含め (p. 6)、それを「商品貨幣」と「代表貨幣」に分類する。さらに、国家貨幣をとりうる形態から「商品貨幣」、「法定不換紙幣」、「管理貨幣」に分類する。かくしてホートリーの抽象的計算貨幣学説から出発したわれわれはケインズの「管理貨幣」Managed money 概念に到達する。

管理貨幣は象徴的貨幣あるいは紙幣という点で法定不換紙幣に類似し、国家が発行条件を管理することにより、ある価値の客観的標準と関わりを持つ点で商品貨幣に類似する混合的な形態で、「おそらくはこの理由から、その性質は理解するのが容易ではない」とケインズがいうような種類の貨幣である (p. 7)。ケインズは「近代的貨幣の最も典型的なものはますます管理貨幣の形に近づいていく」とみる一方、管理貨幣が100パーセントの価値を持つとき商品貨幣に「退化」し、客観的標準物を失うとき法定不換紙幣に「退化」という意味で「貨幣の最も一般的形態」と考える (p. 7)。それゆえ『貨幣論』は、「主として管理貨幣について述べられているが、しかし結論として得られる公式は、もし必要ならば商品貨幣あるいは法定不換紙幣のどちらかにかかわる特殊な条件にも適用するように、容易に修正することができるであろう」(p. 8)とケインズがいうように、貨幣に関する「一般理論」を目指した書物であった。

ケインズによれば、管理貨幣は1819年<sup>17)</sup>から実施されたが、通貨管理の原理

17) 1819年5月、兌換再開条例 Resumption Act が議会を通過し、1797年以来停止されていたイノ

と方法は全然理解されなかった。そして1844年の銀行特許条例は「一つの正しい原理と一つの重大な混乱とで合成されていた」。その重大な混乱とは、「銀行貨幣の存在，したがって貨幣と銀行信用との相互関係を無視し，そして代表貨幣にそれがちょうど商品貨幣でもあるかのような動き方をさせようとする無益な試み」にあった。そうした試みの背景には，もちろんシュンペーターのいう信用の貨幣理論があったわけだが，ケインズはその混乱は「条例の中に実際に具体的に表現されてはいなかった」「第二の正しい原理がなかったならば，恐らくそれが現実の崩壊にまで導いたであろうと思われるほどのものであった」と述べている (pp. 14-5)。

通貨管理の正しい原理とは，第一は「標準の維持を確実にする手段として，代表貨幣の数量の制限を強制すること」であり，第二は「銀行利率の原理」である。銀行利率が管理貨幣の運営のために有効であるということは「偉大な発見」であり，「極めて目新しいもの」であったが，その後，銀行利率の実際の効果は「周知の事柄となっていったばかりでなく，一つの信仰箇条となり教義とさえなっていた」。しかるに銀行利率の「作用様式」については明瞭に理解されていなかった。ケインズの考えによると「今日に至るまで理解されてこなかった」のである (p. 15)。

銀行利率の作用様式についてケインズは「理論構成のための手掛かりとして」伝統的学説を検討し，3つに大別した(第13章第1節「伝統的学説」)。第一のものは，銀行利率を単に銀行貨幣の量の調整手段とする学説で，ギッフェン，マーシャル，ピグー，ホートリー，カッセルの名があげられている。第二のものは金利政策を対外貸出率の調節による一国の金準備防衛の手段とする銀行実務家の見解である。そして第三のものが，ケインズにとって「この問題の本質と思われるものに最も近い」とされるもので，銀行利率が「投資率，あるいは少なくともある種類の投資の率」に影響するというマーシャルおよびホート

---

、\ngランド銀行券の金地金との兌換が再開された。「新しく採用された制度は，純粋な商品貨幣ではなく混合的な管理〔貨幣〕制度であった」(JMK, Vol. 5, p. 14)。

リー、そして「貯蓄率との比較での投資率」に影響するというウィクセルおよびカッセルの学説である。

ケインズはホートリーの場合は「投資率に影響するものとしての銀行利率という観念にはるかに近づくように思われる」(p. 173) が、銀行利率の投資に対する影響を「一つの特種な種類の投資、すなわち商人による流動的財貨の在庫投資にかぎっていたのに対して、ウィクセルは投資と貯蓄との関係を動かすものとしての銀行利率という基本的な概念にずっと接近していたのである」(p. 176) と述べる。ホートリーの貨幣的経済学において商人は「需要を判断し、供給を規制する」(CC, p. 8) 役割を担う。「生産を始動するのは商人」(CC, p. 25) なのであり、「商人は利子率に敏感なので、信用の全機構は、そこでは商人がきわめて重要な役割を演ずるが、同様に利子率に敏感である」(CC, p. 8) とされる。しかし、ケインズは主張されるような感応性は「恐らく実際には存在しないだろう」(p. 174) と否定した<sup>18)</sup>。

けれども、ケインズはウィクセルについても無批判ではなく、「自然利子率」をそのまま継承しているのではない。ケインズは「ウィクセルの表現はそのままでは支持できないし、またいっその展開がなければ説得的はないと思われるに違いないが、しかしそれは厳密に本書の基本方程式に従って説明することができるのである。なぜならば、もしわれわれがウィクセルの自然利子率を定義して、貯蓄と投資の価値額とが均衡しているときの利子率とするならば」(p. 177) としていて、「非貨幣経済というものがあって、すべての貸出しが実

18) 戦後、ホートリーは次のように述べている。「利子率に対する取引者の感応性を否定することは経済活動に及ぼす銀行利率の効果を全く否定してしまうことだ。ケインズの『貨幣論』公刊以来、少なくともわが国では、それがアカデミックな経済学者の支配的見解となってしまう。その結果、インフレーションを抑制するために銀行利率を引き上げようとする大臣は2つの側からの批判にあう羽目になった。政治家の批判は高い利子率は失業を引き起こすと警告するものであり、専門家のアドバイザーはあまり効果がないというものである。両者の見解は互いに相いれないのだが、当局者が政治家に対抗するのに専門家の支持は得られないのである」(Hawtrey [1961], p. 5)。また銀行利率政策は取引者の感応性に基づくものであり、これを否定するラドクリフ委員会は積極的かつシンプルな提言をすることができないと Hawtrey [1961] の表紙カバーにある。

物の形でなされるとした場合に、一般に行きわたることになると思われるものと同じ率であるはず」(p. 176) というウィクセルの自然利子率の実物面をすっかり拭いさってしまっているからである。

### III 結 語

ケインズがウィクセル・コネクションを表明したのは『貨幣論』第13章「銀行利率の『作用様式』」においてである。そこでは、ホートリー理論は否定され、ケインズになんら影響を及ぼしてはいないかのようである。しかし、銀行利率の作用様式に関する議論はケインズの貨幣本質論の延長にあり、そしてケインズの貨幣本質論は、「代表貨幣」という概念などケインズ独自の考えによって大きく変容しているものの、ホートリーの抽象的計算貨幣学説を基礎にしたものであった。それゆえ、ケインズのウィクセル・コネクションの表明も「話はホートリーから始まった」のである。

### 参考文献

引用文は日本語訳を参考文献に挙げているものについてはそれらを用いているが、『ケインズ全集』、『経済分析の歴史』など該当頁を省略した。

Cencini, A. [1988] *Money, Income and Time*, (Pinter Publishers).

Davis, E. G. [1980] "Correspondence Between R. G. Hawtrey and J. M. Keynes on the Treatise: The Genesis of Output Adjustment Models", *Canadian Journal of Economics* 13, 716-724.

\_\_\_\_\_ [1981] "R. G. Hawtrey, 1879-1975", in O'Brien, D. P. and Presley, J. R. (eds) *Pioneers of Modern Economics in Britain*, (Macmillan), 203-233, 井上琢智ほか訳『近代経済学の開拓者』昭和堂, 1986年。

Deutscher, P. [1990] *R. G. Hawtrey and the Development of Macroeconomics*, (Macmillan).

Fisher, I. [1911] *The Purchasing Power of Money*, (Macmillan)

Graziani, A. [1990] "The Theory of Monetary Circuit", *Economies et Sociétés*, n° 7, 7-36.

Harrod, R. F. [1951] *The Life of John Maynard Keynes*, (Macmillan), 塩野谷九十九

- 訳『ケインズ伝』東洋経済新報社, 1967年。
- Hawtrey, R. G. [1913/1970] *Good and Bad Trade* (GBT), (Constable & Company/Augustus M. Kelley).
- \_\_\_\_\_ [1919/1978] *Currency and Credit* (CC), (Longmans, Green and Co./Arno Press).
- \_\_\_\_\_ [1923] *Monetary Reconstruction*, (Longmans, Green and Co.).
- \_\_\_\_\_ [1961] *The Pound at Home and Abroad*, (Longmans, Green and Co.).
- Hayek, F. A. [1931] "Reflections on the Pure Theory of Money of Mr. Keynes", *Economica* 12, 22-44.
- Hicks, J. R. [1967] *Critical Essays on Monetary Theory*, (Oxford University Press), 江沢太一・鬼木甫訳『貨幣理論』東洋経済新報社, 1972年。
- \_\_\_\_\_ [1977] *Economic Perspectives*, (Oxford University Press), 貝塚啓明訳『経済学の思考法』岩波書店, 1985年。
- \_\_\_\_\_ [1989] *A Market Theory of Money*, (Clarendon Press), 花輪俊哉・小川英治訳『貨幣と市場経済』東洋経済新報社, 1993年。
- Humphrey, T. M. [1986] "Cumulative Process Models from Thornton to Wicksell", *Economic Review*, 338-345.
- Jevons, W. S. [1875/1923] *Money and the Mechanism of Exchange*, (Kegan Paul, Trench, Trubner & Co.).
- Keynes, J. M. [1920] Review of 'Currency and Credit', *Economic Journal* 30, 362-365.
- \_\_\_\_\_ [1931] "The Pure Theory of Money. A Reply to Dr. Hayek", *Economica* 12, 387-397.
- \_\_\_\_\_ *The Collected Writings of John Maynard Keynes* (JMK), (Macmillan).
- Vol. 5. *A Treatise on Money I* (1930), 1971, 小泉明・長澤惟恭訳『貨幣論 I』東洋経済新報社, 1979年。
- Vol. 7. *The General Theory of Employment, Interest and Money* (1936), 1971, 塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社, 1983年。
- Vol. 14. *The General Theory and After: Part II, Defence and Development*, 1973.
- Kohn, M. [1986] "Monetary Analysis, Equilibrium Method and Keynes' General Theory", *Journal of Political Economy* 94, 1191-1224.
- Leijonhufvud, A. [1981] *Information and Coordination*, (Oxford University Press), 中山靖夫監訳『ケインズ経済学を越えて』東洋経済新報社, 1984年。
- Margat, A. W. [1938/1966] *The Theory of Prices*, Vol. 1, (Prentice Hall/Augustus M. Kelley).
- Minsky, H. P. [1975] *John Maynard Keynes*, (Columbia University Press), 堀内昭義訳



- 【ケインズ経済学とは何か】岩波書店, 1988年。
- Moggridge, D. E. [1976] *Keynes*, 3rd ed. (University of Toronto Press, 1993). 塩野谷祐一訳【ケインズ】東洋経済新報社, 1979年。
- Patinkin, D. [1976/1978] *Keynes' Monetary Thought: A Study of Its Development*, (Duke University Press), 川口弘・吉川俊雄・福田川洋二訳【ケインズ貨幣経済論】マクローヒル好学社, 1979年。
- Schumpeter, J. A. [1954] *History of Economic Analysis*, (Oxford University Press), 東畑精一訳【経済分析の歴史】岩波書店, 1960年。
- ステュアート, J. [1767] 小林昇監訳 竹内洋ほか訳【経済の原理—第3・第4・第5編—】名古屋大学出版会, 1993年。
- Tooke, T. [1844/1959] *An Inquiry into the Currency Principle*, Series of Reprints of Scarce Works on Political Economy No. 15, (The London School of Economics and Political Science), 渡部善彦訳【通貨主義の研究】勁草出版サービスセンター, 1978年。
- トゥック, T. [1838] 藤塚智義訳【物価史】第1巻, 東洋経済新報社, 1978年。
- Wray, L. R. [1990] *Money and Credit in Capitalist Economies*, (Edward Elgar).
- 鬼頭仁三郎 [1942] 【貨幣と利子の動態】岩波書店。
- 小島専孝 [1987] 「スラッファのハイエク批判について」【京都学園大学論集】第16巻第3号。
- 小林 昇 [1993] 「忘れられた古典——サー・ジェームス・ステュアート【経済の原理】について——」ステュアート【経済の原理】別冊, 名古屋大学出版会。
- 則武保夫 [1978] 「貨幣論」則武保夫ほか著【ケインズ】(有斐閣新書)。
- 菱山 泉 [1967] 「貨幣理論における投資・貯蓄接近法」【経済論叢】第100巻第3号。
- 平井俊顕 [1987] 【ケインズ研究】東京大学出版会。
- \_\_\_\_\_ [1990] 「ヴィクセル・コネクション」(上)(下)【上智経済論集】第36巻第1号, 第2号。
- \_\_\_\_\_ [1993] 「ケンブリッジ学派における二つの流れとケインズ革命」平井俊顕・深貝保則編著【市場社会の検証】ミネルヴァ書房。
- 矢尾次郎 [1950] 【物価理論の研究】巖松堂書店。
- \_\_\_\_\_ [1962] 【貨幣的経済理論の基本問題】千倉書房。
- 吉田雅明 [1993] 「誰が【ケインズ】を殺したか」【社会科学年報】(専修大学社会科学研究所) 第27号。